

丈人力のススメ

く生々と「人生九〇年」を生きる

堀内正範 著 元『知恵蔵』編集長

こんなこと

その一 「熟成への道」をたどりながら

一 「老人力」から「丈人力」へ

二 長寿を愛しむ三つの秘策

その二 「非を飾る」世相をみる

一 「好事門を出ず、悪事千里を行く」時代

二 三人に三様の高齢期の課題

その三 揺れる家族

一 「MY・・」がないマイホーム

二 「家庭内リストラ」のコア（核）用品

三 暮らしの知恵を次世代に伝える

その四 優れた国産品・地産品が再登場

- 一 「MADE IN JAPAN」の時代
 - 二 途上国産の百貨商品に囲まれて
 - 三 優れた国産品・地産品への契機
 - 四 「新・日本型マネジメント」に活路
 - 五 企業は定年延長で多重構造にシフト
- その五 暮らしの和風回帰

- 一 「四季と特性」が息づく地域に暮らす
- 二 和風の暮らしを共作共演

その六 高齢期二五年の居場所

- 一 「エイジング・イン・プレイス」を定める 3
 - 二 世代交流のさまざまな現場 15
 - 三 地域づくりの仲間づくり 27
 - 四 まちの中心街を「モノと暮らしの情報源」に 35
- その七 一 高齢者としての八面玲瓏

- 一 一住民・一市民・一国民として
- 二 一国際人として

付 三世代年表 生年別の人口（男・女）、流行語、流行歌

その六 高齢期二五年の居場所

一 「エイジング・イン・プレイス」を定める

高齢期から終末期をすごす場所

* 「ふるさと生活圏」再興に加わる

夜空に舞うホタルの光は、過去に出会って見失った何かなつかしいものを想い起こさせる力を持っている。

「おヨネだろうか、コハルだろうか」

外交官を辞した後、徳島に住んだモラエスは、闇に弧を画くホタルの光に、先立ってしまったたふたりの女性を実感した。

「ホタルの飛翔」は終わることのない何かへのリード・ライトなのだ。「ふるさと」を蘇らせるものは何かを探っていた人たちによって、「水は清きふるさと」のシンボルとして、ホタルは全国各地で蘇った。「ほたるサミット」も開かれている。

春になると、きまって蠢動（字づらも音もい）していた小さい生きもののうち、何かが姿を見せなくなる。目の前で次々に失せていくのだが、季節に鈍感になった人間は、そんな小さ

な「自然環境」の変化に気づかない。自分の生とかかわりがないと思っている。

環境省レッドリスト（平成二五年公表）によれば、日本で絶滅の恐れのあるものは一〇分類群三五九七種。そのなかに、なんとニホンウナギまで含まれた。ウナギが絶滅？ かば焼きと肝吸いがなくなる？ ここまできてやっとドツキリ。朱鷺・トキ *nipponia nippon* の絶滅（二〇〇三年、キンが最後）のときは中国トキによる佐渡での再生であり、物語の世界であったが、

ウナギとなるとにわかには実感がわく。なんとかして自然ウナギの回復をとみんなが動き出す。ひとくちに「環境の回復」といっても意味がひろい。ヒト中心の利用が行きすぎて自然の再生力に乱れや崩れを生じさせた「自然環境」の回復がいわゆる。生産を優先したあげくに壊された消費する現場での「生活環境」の回復がいわゆる。リサイクルなどがそれ。

そしてもうひとつの環境である「歴史・伝統環境」の復興がある。暮らす者の位置に近づいて、「ふるさと生活圏」の復興ということになれば、近代化一四〇年の渦中で失われたさまざまな歴史・伝統行事や風習の復興がある。前章でも取り上げたが、季節のめぐりに思いをめぐらせば、家庭や地域には再興可能な祭事や行事が数多くある。失ってきた理由もあるのだろうが、暮らしのテンポが早くなり、時間刻み分刻みになれば、季節は窓の外に来て去っていくだけになる。暖冷房完備のときされた空間で暮らすことで、「走馬看花」どころか、テレビだけの「走馬看花」を不思議に思わなくなる。

それが「恥ずかしい」という程度の日本文化の水準は保たねばならない時期にきている。

「歴史・伝統環境」の保存を検討するには、「ふるさと」が息づいていた一九八〇年ころまでの経緯に詳しい高齢者のみなさんの再興への意欲と若い人びとの継承への熱意との両翼の働きがないと飛び立てない。

みずからの命を越えて地域に長く生きつづけるものを再興して、その保存に身を投ずるのも、高齢期での「エイジング・イン・プレイス」の選択のひとつとなる。

ふるさとの「原風景」と「現風景」

*ニシキより地域をつくる仲間として帰る

少年時代に大成を期待されて「ふるさと」を離れた人びと。都会に出てそのまま職業に就いたり、大学で学んでから都会暮らしをし、結婚をし、次世代を育ててきた人びと。定年後もそのまま住み慣れた都市郊外に住んで、最後はひとり住まいになって「都市浮遊型の人生」で終わる人も多い。長く居住していたところに居つづけるか、「ふるさと」へ回帰して高齢期から終末期をすごすかで、「エイジング・イン・プレイス」での人生の成果の違いになる。

しごとを終えて高齢期から終末期を「ふるさと」にもどって過ごそうと考えている人びと（Uターン）、あるいはそういう「ふるさと帰巢型（Jターン）の人生」を思う人びとには「ふるさととの原風景」があつて、静かに「ふるさと」（一九一四年、ちょうど一〇〇年前に作られた）を

歌えば、なつかしい山や川、うさぎやこぶなは変わることなく眼の裏に浮かぶことだろう。

「いかにいます父母・・」となると、父母はすでになく記憶の中の存在としてよりほかなくなっている人も多いだろうが、あるいは大正生まれの母上がご健在でおられるかもしれない。

先の大戦ののち半世紀あまり、「ふるさと」の現風景「は求めているものと違う姿になっている。ここ二〇年ほどの間に「ふるさと」が失ってしまったものの多いことにも気づく。

得たものといえ——舗装された真っ直ぐな道路。メカニクな騒音。コンビニ、スーパー、駐車場。コンクリート造りの新校舎と新庁舎。郊外のゴルフ場・・そしてマイカーとプレハブづくりのマイホーム・・まだある。

失ったものといえ——安心して歩ける小路。緑ゆたかな雑木の里山や鎮守の森。ヒバリやカエルの声。商店街の活気。わら屋根の篤農家・・そして野外で遊ぶ子どもたちの歓声や腰の曲がったお年寄りの笑顔・・まだある。

だからニシキを飾って帰るのではなく、地元に残っていた仲間とともに「ふるさと」の再生と創成につながる事業に加わる気構えを持って帰ることだ。「帰りなんいざ、田園まさに起こすべきとき」である。休耕田の時代も終わろうとしている。新しい「地域の時代」が始まろうとしているいま・・ふるさとにニシキを飾って帰って、違和感のある邸宅を建てて、地域と絶縁した暮らしをするような人は期待されていない。「ふるさと生活圏」をともにつくる気構えが求められている時節なのだから。

地方自治体と地域高齢者の協働の時代が動こうとしているのだ。

「地域医療・介護推進法」が二〇一四年六月に成立した。

来年からは中学校区単位で、増えつつける「支えられる高齢者」のための「地域包括ケアセンター」が充実する。それとともに、「支える側の高齢者」の自主的支援が要請されることになる。施設完結型から地域（自宅）完結型への医療転換は、「エイジング・イン・プレイス」として「ふるさと回帰」する人にとっては、歓迎すべき政策転換となる。「子ども・子育て法」もまた両親ふたりと施設から、地域が助け合って次世代を育てようという政策転換のときだから、可愛いお孫さんを預かって、いなか暮らしをさせるとよい。都市に残った若いふたりはもう一人産み育てるチャンスを得ることになる。

合併のあと、どれほどの地域がどれほど元気であるかを知るためにおこなわれた調査「地域再生に関する特別世論調査」（内閣府・二〇〇五年六月）がある。少し間をおいたデータだが、その後の経緯に大きな変化はみられない。

合併協議は、「生活圏の広域化」や「少子高齢化」などを課題としたが、ひと段落したところで、どれほどの地域がどれほど元気であるかを調べたものだが、自分が住む地域に「元気がない」と感じる人（四四％）が、「元気がある」と感じる人（三八％）を上回っていた。「元気がない」と答えた人は、その理由として「子供や若者の減少」（五九％）、「中心街のにぎわいの薄れ」（五一％）、「地域産業の衰退」（三九％）などをあげている。いまのみなさんの実感とそう

遠くない。その後も傾向に変化のようすがない。

そして活動の中心となるのが国（一八％）ではなく、住民（四八％）と地方自治体（三八％）であることがはっきりした。国の一八％というのは、もはや活動の中心が「国ではなく住民のみなさんと地方自治体です」と国がいわざるをえないほどの低率だったのである。

「子供や若者の減少」には「少子化」があり、「中心街のにぎわいの薄れ」には商品流通の変化がある。そして「地域産業の衰退」には大資本による系列化、グローバル化による生産拠点の海外移転といった事情がかかわっている。個別の自治体の手には負えない事情であるが、「子育て」を施策NO1の自治体にし、子どもや孫たちを呼びよせる。高齢者がふるさとの地で子どもたちと暮らし、情報源になる街の中心をつくり、地域産業を起す原動力になればいい。

「ふるさと」に残った高齢者とUターンした高齢者がもつ「知識、技術、資産」をどう活かすか。都会から地域へという「ふるさと生活圏」再興への風が、新たな地域を創成する原動力になるかどうか。「地域いきいきシニア」になれるかが問われているのである。まずは地域の「いきいきシニア」である農家のおばあちゃんに教えを乞うことから始めよう。

「均衡ある国土」から「個性ある地域」と

*均衡を基盤に特性を重ねる

新幹線の座席でうとうとした後で、身を起こして、列車の窓から外を見る。

「いま、どこさ走ってるん？」

流れ去っていく風景からでは、どこを走っているかの判別がつかない。外国での話ならともかく、わが国の国内での話。利用した人ならだれもが経験していることなのである。次々に展開する田畑も家並みも、どこも同じような風景なのだ。

新幹線の車窓からの風景の中に、「ここはR町 △△が特産」といった程度の看板くらいはあってもよさそうだが、地方特性（特産）がいつこうに立ち上がっていない。「地方の時代」といわれずいぶん経つというのに。

しかし、これは見方の違いによるのであって、いずれの地も凸もさせず凹もさせずに、「富を等しく分かち合いながら、ともに豊かになる」という、先の大戦後にわが国の先人が選んで目標としてきた「日本的よき均等性」の成果なのである。

「豊かになれる者からなれ」とはせず、個人差や地域差をなくして、等しく成果を分かち合おうと務めてきた善意の人びとによる積年の成果なのだ。

その意味でなら、これまでも「地方の時代」だったといえる。東京一極集中の風潮の中で、優れた人材を提供しながら、地方に残った人びとは、「モノと場の平等な豊かさ」のために、たゆまぬ努力をしてきたのである。

みんなが等しく貧しかった時代、若者たちを大都市へ送り出し、地元に残って貧しさや不便

さにも耐えながら辛苦した人びと。いまはもうその姿は遠く定かでないが、地元のために尽くした先人の努力を無視しては、現状の公平な豊かさに対する理解の公平さを欠くことになる。旧市町村長室には歴代の首長の写真がかかっている、高齢者のだれもがよい顔をして並んでいた。合併後はどうなったのかはわからないが、それに励まされ力ももらって現役首長はしごとをしてきたにちがいない。

新幹線を利用しながらこう語るのは失礼になるが、「善く行くものは轍迹なし」という先哲のことばに耳を傾けたい。すべての業績を周囲の人に振り分けて、みずからは轍の跡を残さず去っていった善意の人びとの姿を忘れ去るわけにはいかない。

等しく富を享受するという先人の善意から始まった「均等化としての地方の時代」が、時を経て「横並びの安心感」による自立意識の欠如となり、推進力を失ってしまった。ここでも成果主義といった個人の目先の競争誘因を取り込まねばならないほどの転機を迎えようとしている。

そこで、その危機感の表現として政府が掲げたのが、「国土の均衡ある発展」から「地域の個性ある発展へ」という「骨太の方針」のフレーズ。そういう転機への要請としてわかりやすく表現されている。

たいせつなので再記するが、ここで注意すべきことは、「くからくへ」というのは「くを転換して」ではなく、正確には「くを多重化して」と理解すること。

「地域特性」の回復だからといって、「均衡」を一八〇度転換するのではなく、これまで国がリードしてきた「横並びの均等化」によって得た現況に、さらに地元の発想を「多重化」して地域の活力を呼び起こすことである。

そう理解しなければ先人が善意として積み重ねてきた営為をまるごと無視することになってしまう。そんなことは後人としてあるまじきことではないか。

「地域に根ざした暮らしの知恵がどの地方にもあったはずなのだ」と思いながら、新幹線の客は、どこかわからないまま車窓から目を戻す。前方の出入り口の上の小さな空間をニュースが流れ、「あと三分でN・・」というお知らせが流れた。

「特性が息づくわが町」づくり

＊みんなで考案する「しくみ」と「特産品」

貧しいときは貧しいなりに、豊かになれば豊かさをお互いに分け合う。この「モノと場の横並びの平等」が、敗戦のあと、復興事業の基本となってきたことで、地方の人びとに安心感を支えてきたのだった。

その意味では国のしごとと携わってきた官僚の半世紀にわたる事業分配の業績といえる。だから新幹線の窓から見ても凹凸が際立たないようなまちづくりが目標とされ、実現されてきた。

「モノ」における平等主義のみごとな時代表現である。

その証としてR町のような小さな町でも、隣の大きな市に劣らず、横並びの「基本課題」を共通して持つており、それを担当する課係と職員がいる。そしてこれまでの地方議員の主なしごとは、各地域に等しく予算と事業を配分することにあった。

新たに「地域特性が息づくわが町」を創り出すには、まずみんなで手分けして地域特性を掘り起こすことになる。その上で、新しい課題を設定して担当する部署を構成するわけだから、従来の課係をなくすのではなく、その上に重ねて構成することになる。

なぜとって、「均衡ある国土の発展」はこれからも基本として継続するからで、その上に、「地域特性」を活かしたまちづくりをめざす活動が重ねられるからだ。

だから自治体は、せっかちに従来の課係を解消するような単純な変更は避けなければならない。職員も住民も混乱してしまう。新旧ふたつの課題をうまくつないで対応する課をつくり課員を配置することになる。

すでに各地で活動しているのが、「まちづくり推進課」「子育て支援課」「高齢社会対策課」「伝統産業育成課」などで、そのほかに二課を合わせた部署、たとえば「健康福祉課」「産業観光課」「スポーツ生涯学習課」などの活動として推進されている。

「シルバー人材センター」は、地域の高齢者むけ求人に応じるだけではなく、地域特性を活かすために、高齢者人材による起業に乗り出すこと。高齢者のもつ能力を蓄積し活かして、まち

の活性化のための新たなしごとづくりが中心にならなければ存在の意味を失ってしまう。

「地域包括ケアセンター」は、地域住民の心身の健康、生活の安定のために必要な支援を包括して担う中核的機関として、保健師、社会福祉士、ケアマネジャーはじめ自治体職員と社会福祉協議会、NPOメンバー、多くの住民の善意を統合しながら機能している。さらに健全なうちから関わる新しいしくみが合わせて考慮されることになる。

国交省の方針も高齢者の力を活かした「地域特性」の開発にあることから、各地から具体的な実践事例が報告されている。京都や奈良はいうまでもなく、名古屋、横浜、浜松、三鷹、市川、郡上各市の官民協働の「まちづくり」の経緯は、それぞれに特質のあるモデル事例として期待される。

「中心市街地活性化」の基本計画では「特性のあるまちづくり」が指向されている。

城下町では「街なか回遊」(彦根市)・「回廊」(会津若松市)、港町では「みなとみらい21・OLD&NEW」(横浜市)・「港町スクエア」(気仙沼市)・「海DO戦略」(下関市)、そして「まると博物館」(有田町)、「都市型高感度市街地」(宝塚市)・「体感スポット点在のまち」(久留米市)、「フアツション・ジュエリー都市」(甲府市)・「リ・ガラスのまち」(水俣市)、「こみせ・まちづくり」(黒石市)・「詩情公園都市」(小諸市)・「市(いち)の復権」(市原市)、「まちなかづくり」(臼杵市)・「へそのまちのへそづくり」(富良野町)・・・。

街並みの整備、歩きやすい環境づくり、いこいの場の設置、観光資源や歴史資源の活用、イ

ペントなどに特性を活かしたまちづくりが企図されており、地域開発の場に地元高齢者の経験を参考とする事例に事欠かない。

身近な実例として各地からは、農業の六次産業化によるご当地グルメや新製品。環境に関する「エコ・ライフ」「スロー・ライフ」による活動や居場所づくり。「ホテルの里」や菜の花・レンゲ・コスモスといった「花の里」や「そばの里」「和紙の里」といった各種の地産品の里づくり。そして地元の焼き物・織物の再生。和太鼓・歌舞伎・踊りなどの伝統文化・芸能の復活。民俗・ことばの保存と伝承など地域特性を活かした活動の成果が、暗いニュースに割ってはいって明るいニュースとしてテレビで紹介されている。

「地域ブランド製品」としてこれまでも地域で生まれて国の代表になった製品は数知れない。地域名のついた製品は、地域での並みならぬ努力のたまものである。みなさんにも親しいものの例をあげてみよう。

松前漬、石狩鍋、津軽塗、南部鉄器、喜多方ラーメン、益子焼、桐生銘仙、草加煎餅、安倍川餅、信州蕎麦、岐阜提灯、加賀友禅、九谷焼、瀬戸物、伊勢海老、松阪牛、宇治茶、奈良漬、吉備団子、讃岐うどん、今治タオル、伊予柑、博多人形、伊万里焼、薩摩揚げ・・・。

特性を生かした地域の発展のためには、地元企業は「モノづくり」に、自治体は「まちづくり」に、そしてとくに高齢者はこれまでになかった高齢期の暮らしのための「モノ、サービス、居場所」をこしらえる活動や事業を案出して協力して展開することになる。

「地域特性」を支える「地域の四季」を際立たせる地道な試行が、「地域の個性ある発展」につながる。高齢化に見合った「地域生活圏」達成への道程であることは間違いない。そのため高齢者の知識、技術を活かす「エイジング・イン・プレイス」の現場はたくさんある。

地域の高齢者が一生のあいだ用いる「地域特産品」を持った「個性があるわがまち」が競いあう。わがまちの製品が周辺地域での人気を得られれば、それは「地域ブランド製品」として定着する。新地域ブランド誕生のチャンスなのである。そのうちの優れたものは、姉妹都市や友好都市を通じて、海外の高齢者にも受け入れられる輸出品になるにちがいない。

二 「世代交流」のさまざまな現場

「家族総出」の子育て・孫育て

*地域が担う「多子化・高齢化」社会

ここ一五年の育児の現場では、「祖父母」の「孫育て」はまったく期待されてこなかった。「両親以外」あるいは「地域住民」として扱われてきたのである。わが国の次世代の育成にとって「祖父母」という存在は評価ゼロなのである。これまでの経緯はともかくとして、なんとしても行き過ぎであろう。

両親と施設による子育てのなかで軽視して扱われていても、実際には孫の傍らにいて親の目と違った目で見て、知らないことを教え、暮らしのこまかな技能を伝え、励ましを与え、孫から二重マルの似顔絵をもらう祖父母は数多い。

九月第三月曜日の「敬老の日」に花束をもらったおじいちゃんおばあちゃんは、最近は「孫の日」（一〇月第三日曜日）にお返しをする。過保護や板ばさみを避けながら、社会適応性のある子どもたちを育てる役割を果たしてきたのは、おじいちゃんおばあちゃんではないか。

「ひとりじゃないよ、みんな育てる未来に輝く子どもたち」
いいキャッチフレーズである。

ここでは子どもへの呼びかけであろうが、祖父母からいわせれば、「（親）ふたりじゃないよ」といいたいところである。「家族総出」で、そしてさらには地域のみんなで、地域の子どもの成育を支えて見守っていくことが、もっとも有効な「少子化対策」であり、家庭・社会づくりなのだから。高齢者にとって「孫育て」は身近で優しい心が生かせる「エイジング・イン・プレイス」の現場である。

地方のご家庭では、伝統的な「家族総出」の子育てで女性の社会進出を支えて、子育ての現場を引き継いでいる。子どもたちは初めから、おじいちゃんおばあちゃんの存在を当然とし、「うちのおじいちゃんね」といって、教えてもらった知識や技能を仲間に伝授し自慢する。それが「わが家三代の暮らしの知恵」の伝承の意味合いである。

それでもこれ以上に家族に過大な負担を求めることはできないとして、国は「子ども・子育て法」では幼稚園・保育園を一体化した「認定こども園」で、幼児保育と幼児教育を連携するとともに、元気なお年寄りの参加で地域の子どもを守り、企業はワーク・ライフ・バランスで子育て期の女性を支援し、若い家族の負担の軽減を図っている。

少なくとも三割ほどの「三世代同居」家族を保持しないと、「わが家の暮らしの知恵の伝承」が途切れてしまうし、別項で触れるが、医療が在宅中心に向かうことになれば同居、近居による三世代の家族の絆は欠かせない。

ここは高齢者のみなさんにはご自分の経験として思い起こしてほしいところだが、地域で育つ子どもたちのために、お年寄りはいろいろ教えてくれたのだった。イモの苗付け、茶畑づくり、七草とり、すだれづくり、トンビ凧・いまや少なくなってしまったが。子どもの安全な居場所をこしらえるといった活動も、地域の高齢者のアイデアなしにはすすまない。

地域が湧き立つことを願わないものはいない。次世代の育成を担うのは両親ばかりではなく、豊かな経験と知識と技能をもつ地域の高齢者のそれが、さりげなく生かされる。

多くはないが、「育孫書」も出版されている。自治体がすすめる「祖父母が孫と遊べる児童館」もあるし、「孫育て講座」や「孫育て教室」に出て新しい育児のやり方を知り、孫たちとどう接したらいのかを考えたり話したりするチャンスも増えている。商店街の空き店舗を利用した「みんなのたまり場」もいい。

国の政策として期待されていないからといって放っておける時期ではない。街を元気にするのは住民であり、ふるさとを愛する「子・孫」を育てるには、父母の「子育て」に加えて、祖父母の「孫育て」がうまく重なるのが自然であり当然である。

遠出をしない高齢者は、子どもたちと同じ地域で高齢期を過ごすことになる。だからここで「エイジング・イン・プレイス」は「孫世代」との交流の場である。孫たちとの接触は「わがまの暮らしの知恵」を伝える世代交流の場となる。

マンガで育つてすぐにキレル子どもにも、豊かで精細な表現力を身につけさせて、感情のコントロールができる子どもにしようという「読み聞かせ図書館」も重要だし、地元の伝統技術・芸能を伝授する活動などには高齢者の技と熱意が生きている。

国の政策は都市型の夫婦ふたりの抱え込みによる子育てになお固執しすぎている。地方の住環境に配慮して、祖父母や親類による「かわいい子・孫育て」の素直な愛情を活かすこと。とくに「祖父母の支援」による「孫育て」という伝統を引き継ぐことを軽視しては、日本の将来の骨組づくりは成り立たない。

「三世代会議」と「三代会館」

*暮らしやすい地域づくりの合流点

ことし平成二六年度の内閣府主催「高齢社会フォーラム in 東京」（七月二九日）には、「多世代からみたシニアの意識改革」と「シニアと多世代がつながるために（ICTの活用）」という分科会が設けられた。これまでは、高齢者による高齢者セミナーの感があったが、世代をつなぐことで共有する「長寿社会」への視点がうまれる。若い世代の議論のなかで、こんなシニア像が指摘された。

嫌われシニア、愛されシニア、孤独なシニア、アクティブ・シニア、プラチナ・シニア、良いシニア、困ったシニア、悪ガキシニア・・・。

嫌われシニアや困ったシニアは、差別する、空気が読めない、自分のことばかりいうなど。愛されシニアや良いシニアは、潔い、自他がわかる、甘えさせてくれる、など。

プラチナ・シニアは、強く輝いている。悪ガキシニアの評判が思いのほかいいのは、意識しておいていいかもしれない。

これまでの世代間の出会いといえば、地縁組織の「老人クラブ」と「子ども会」との間での交流が知られる。「全老連」（全国老人クラブ連合会）がおこなってきた「地域を豊かにする活動」（旅行や将棋など）がそれで、「伝承活動」や「世代交流」は組織あげての活動の柱になっており、力をもつクラブが、地域文化や芸能・民芸や手工芸、郷土史などを子どもたちにもたちに伝承している。クラブの若手会員による独自の活動も見られる。日常的で目立たないが、地域で新たな交流活動を始め際には事情を把握しておいたほうがいいだろう。

いずれにしても地域の子どもたちが当面している問題は、「老人クラブ」と「子ども会」との間では担いきれないほど山積しており、もっと広い地域生活圏での高齢者による活動が、次世代育成の事業として必要なものになることはまちがいない。

千葉県柏市では、市や東大高齢社会総合研究機構やUR都市機構との協働の成果として、ここをベッドタウンとしてきた高齢世代が動き出し、優れた知識や技術を活かして地域でのしごとに参加している。海外勤務の多かった商社マンや技術者が、子どもたちに生きた英語を教え、理科系の知識の伝授に一役かっている。

地域の青年館や公民館ではなく、先駆的な活動の場として、「三世代交流館」（大洲市）、「三世代ふれあい館」（土岐市）など「三代会館」を称するものもある。三世代の代表者がそれぞれを代表して親しく交流、合議する場として運営できるようになれば、それぞれの立場での活動を理解し支援しやすくなる。地域の世代別あるいは合同の集会や文化事業の施設として有効に機能するだろう。

別のところで論じたが、「超高齢社会」は現役長生型の高齢者が存在感を示すことで、「三世代多重社会」を構成することになる。高齢者が地域活動に参加することで、それぞれの地域の特性や伝統を活かして、特産物を育て、篤農家を守り、若者を鍛え、子どもたちに生きる夢を与えられる地域にすることが可能になる。自治体はもっと仔細に高齢者の能力を知って参画を求めることだ。それがこれまでにない次元のふるさとづくりの拠点となる。

住民みんなが暮らしやすい地域づくり、車いすで行動できる「バリアフリー」による環境の整備など、「ユニバーサル・デザイン」の考え方に配慮したまちづくりは、厚労省の「バリアフリーのまちづくり活動事業」として各地でさまざまに実現している。

さらに重ねて物産、文化、余暇にわたって「青少年」「中年者」「高年者」の人びとが、それぞれの立場で暮らしを便利にし、またお互いの活動を支援し合うのが「三世代会議」である。そのための常設の施設が「三世代会館」であり、それぞれの要望を具体化していくために、この自治体にもあってもいい会議であり施設である。

さまざまな課題で「三世代会議」を開くこと。先人の事跡から学び、後人に伝え、いま暮らしている三世代がそれぞれの力を十分に発揮できる「三つのステージ」を形成する。その上でみんなが共有する「新しいふるさと樹形」を整え、幹を太らせる。

そんな活動の中で高齢期の日々を充実して過ごすのが「エイジング・イン・プレイス」の人生である。

「地域シニア会議」が「共生活動」の拠点に

*生活支援コーディネーターが登場

地域に暮らす高齢者には多様な人びとがいる。

中学校を終えて、仲間が都会へ出て行ったあと、ふるさとに残って、地域の物産や伝統行事を守り、次世代を育ててきた人びと。ふるさとを離れて都会で活動したあと、高齢期から終末期をふるさとに戻って過ごす人びと。また魅力のある町には、これまで関係を持たなかった人びとも高齢期を過ごすためにやってくる。

こういうすぐれた能力を持つ高齢者が、地域で出会ってもお互いにあいさつを交わすことはあっても、高齢期を過ごすまち「エイジング・イン・プレイス」で、「地域特性を活かした住みやすいまち」にするために、それぞれに長く蓄積してきた知識や技術や人脈や資産などを、有効に活かすために議論することがない。

自治体もそれを知りながら動か（け）ない。共生のために強制することはできない。「しくみ」がないのである。

地域に住む高齢者が「共生の文化」（堀田さんの用語）の証として、自由に、自在に、自発的に、自立して、集まってくる。そういう「しくみ」をここでは「地域シニア会議」と名付けよう。もちろんすでに活動しているところもあるし、呼称も形態も自由だが。

Uターン型人生を過ごす人のニシキはいろいろな。飾って帰る必要はないのである。ふるさと再生のために保持する知識と技術を提供すればいいし、資産は三分の一でいどで並みの住居をこしらえ、三分の一を高齢期を暮らすまちづくり提供し、残る三分の一は留保しておくのでちよよいいのではないか。

前述した「さわやか福祉財団」の堀田力会長は、「新しいふれあい社会の創造」の旗印をかかげつづけて二〇年余り、ボランティア活動を通じた「NPOの法人化」から「地域包括ケア」まで成果をあげてこられたが、サラリーマン定年後の一〇〇〇万人の男性の社会参加だけは未達成なのだという。いまやつとその機運「共生の文化」が動きだしたのではないか。

まちへ出て参加しないと「恥ずかしい」と思う暮らし。

定年後の高齢者が保持する能力を活用して、「生活支援コーディネーター（地域助け合い推進員）」として参加することが広く求められている。この活動なくしては地域の活性化はありえない。地域の活性化なくしては国の活力も国防力もありえない。そして高齢者への敬愛も尊厳もありえない。まさしくまったなしの「エイジング・イン・プレイス」の時期なのである。

自治体は支えられる高齢者のための「医療と介護法」の実施にあたって、支える側の高齢者から「生活支援コーディネーター」を認定して、官民協働の活動を強めることになる。そのまわりに、（ここは「強制」でなく「共生」でなければ動かない）それぞれの生活支援のための「地域コーディネーター」が参加する。地域の高齢者と語り合い、たくさんのお水玉模様のようないま別の活動主体を形成する。健康（認知症や終末期医療も）について、就労について、趣味について、まちの緑化について、孫育てについて、あるいは世代間について、男女共生について・など。さまざまな分野の地域の課題について語り合い解決する機会と場をこしらえる。

来年は高齢者の地域デビューの年になる。この「しくみ」の成否が、地域活性化の成否につ

ながることになる。

「地域コーディネーター」のメンバーのうちには、NPOのリーダー、元議員、元職員、名誉教授、芸術家（陶芸や園芸など）、農産家、医師、僧侶・などが想定される。働く名士・名誉町民もいる。その活動の総体が「地域特性を持つまちづくり」になる。

そして町の来歴に長くかかわってきた地元高齢者、外部で培った経験や知識をもつ新住民である高齢者がともに参加する「地域シニア会議」を構成する。

地縁の組織は既存の権益を守るために排他的になってはいけないうし、一方で外から加入した人びとも地域の伝統やしくみを無視してこれまでの暮らし方を持ち込もうとすることはよくないことだ。お互いの長所を組み合わせた「地域シニア会議」が成立してはじめて、「地域特性を持つまちづくり」形成への拠点ができたことになる。この成立の成否、遅速が「わがまちの活性化」の差を生むことになるだろう。

地域民主主義による自治能力を証明

* 新次元の地域社会を実現して

「地域シニア会議」の成立は同時に、まちの将来を担う子どもたちの「青少年期のステージ」、これまで地域を代表して活動している中年世代のための「中年期のステージ」に配慮しながら、

これまでになかった新たな「高年期のステージ」をこしらえることになる。三者がバランスよく機能する態様をつくりあげる検討がはじまる。

この「地域の三つのステージ」の創出は、「長寿社会」に即応する住民活動であり、それはまた三世代それぞれが推挙したメンバーによる「三世代会議」という新しい活動主体を成立させることで推進される。高齢者のイニシアティブによってつくられる新たな「しくみ」であり、それ自体が地域の特性を表現したものになる。

青少年・中年、高年層の代表者による「三世代会議」の「高齢者部門」が「地域シニア会議」である。

これはこれまで活動してきてやや固定化した「老人クラブ」「社会福祉協議会」「地域包括支援センター」「シルバー人材センター」「生涯学習センター」「地域文化団体協議会」などと人脈が重なりながら、新たななまちづくり事業活動の中心拠点となる。「生活支援コーディネーター」を支える「地域コーディネーター」である人びとのたまり場である。

ここに地域の歴史になかった「新たな歴史をつくる」活動がはじまる。この「三世代会議」の設立と運営は、キイになる人の立場がたいへん重要になる。

公開の「地域シニア会議」は、地域住民の仔細な要望をしっかりと聞きとることができる場となる。たとえば高齢者の日用品の購入から、医院・病院への通院、図書館など公共施設の利用法、散歩道の整備、地産品情報、四季の伝統行事・風習、人物評など、共通した話題から個別

の要請までいろいろである。

公開だから爆笑と拍手と思わぬ展開の議論のうちに会議は進行する。地域の課題を具体的にその解決法まで検討するのが「地域シニア会議」の役割である。

一般的には中学校区で三〇〜四〇人ほど。課題ごとに七〜九人といった分科会を構成する。「わがまちのベスト・ナイン」か「シニア・イレブン」。他地域と異なる内容が将来の「地域性のあるまち」をつくる契機となる。自薦、他選、互選、地域の実情を反映したしくみになる。

長く暮らしてきた住民なら二〇人くらいのメンバーは推薦できるにちがいない。

何より「地方からの本流（地域民主主義）」をおこす潮目の時期だから、ありきたりの発想や表現力の人では当たれない。とくに公開の「地域シニア会議」では、未整理なままのナマの住民の意見を的確に整理したり、多様な意見を調整したり、党派的な利害を排して中立を保ったり、民主的な進行を保ちながら即座に公平な判断ができ、柔軟な表現力のある人の選出が求められる。

「地域シニア会議」が中心になって「三世代会議」を呼びかける。「三世代会議」が討議を重ねて作りあげた「地域特性を持つまちづくり」（ふるさと創生一一構想になる）は、住民をも自治体をも県をも納得させるレベルで「地方主権」「平和擁護」「民主主義」を具体的に担保する自治能力の表現となるにちがいない。国を守る国民意識の醸成も「地域からの本流」もここから始まる。ここからしか始まらない。

「地域シニア会議」は、住民の意向を集約しながら、地域の高齢者や子どもたち、そしてみんなが暮らしやすい生活環境を具体的に検討していく。できるかぎり多くのテーマについて、これまでの医療、介護、福祉などについてはもちろん、環境や物産や伝統やまちづくりや高齢人材養成といったテーマについても議論を繰り広げていく。地方議会が「均衡あるまちの発展」を担い、「地域シニア会議」が「特性あるまちの発展」に寄与することになる。

「人生九〇年時代」を生きる高齢者が、いままでの歴史になかった新次元の地域社会を後代に残す「歴史的なしごと」を仕上げることになる。

三 地域づくりの仲間づくり

人材養成は「明治・昭和大合併」の重要課題に

*「村立尋常小学校」と「町立新制中学校」

「ヒトづくり」は市町村合併の重要な課題だった。

明治と昭和のふたつの町村大合併のときには、それぞれに新しい自治体が地域発展のための人材養成（教育）を重要な目標の一つとしたことに改めて注目したい。

明治維新後の「明治の大合併」のときには、わが村の「村立尋常小学校」が合併のシンボル

とされた。村立小学校は子どもたちに多くの夢を与え、地域を発展させる人材を育成した。その夢はいつしかお国のためとなり、半世紀の後には戦争へと子どもたちを駆り立てていったが。三〇〇〇五〇〇戸の規模で教育、戸籍、徴税、土木、救済などが課題だった。

大戦後の「昭和の大合併」のときには、わが町の「町立新制中学校」が合併のシンボルとされた。子どもたちは町立中学校を卒業すると、地元の産業を守る者は残り、多くは都会へ出て行って高度成長の担い手となった。八〇〇〇人規模で、新制中学、消防、保健衛生などが共通した課題だった。

さて二一世紀の新時代をめざした「平成の大合併」では、新しい自治体は将来の地域を担う人材を育成するために、何をシンボルとしたのだろうか。

今回、国（文科省）は、生涯学習のほかに明確な指針を示さなかったのである。

課題がなかったわけではない。明治の「村立尋常小学校」、昭和の「町立新制中学校」という合併時のステップからいくと、「市立の高等教育機関」であり、それは合併協議の課題となった「少子・高齢化」に見合う対策である意味からいって、高齢者が対象の教育機関となるべきものであった。

「市立高年大学校」といった態様のものが、今回の合併の教育（人材養成）シンボルとなると想定された。すでに各県・各市には六〇歳以上を対象とする「地域生涯大学校」（高齢者大学校・シニアカレッジ）が開設されていて、高齢者教育の多様な成果をあげており、本来なら文科省

が地域自治体の主導において地域発展のために設置を検討するよう指示すべきだったのである。本稿の使い分けからすると、生涯学習は「長寿社会」のためであり、「市立高年大学校」は高齢化時代の高齢期（二五年）のための教育機関だったのである。

残念だったのは平成の市町村合併の先駆を担った地方の自治体にはそういう構想がなかったことである。そして何よりも文科省にそういう高齢人材養成を推進する強い意向がなかったことである。

「市立高年大学校」（高齢人材養成センター）

＊地域社会をつくる高齢人材を養成する

どういう構想がありえたのか。

地元の高齢者、地域に帰って過ごす高齢者を対象にする。対象者は六〇歳以上。長い高齢期を安心してすごすための知識・技術を学ぶとともに地域のもつ課題を考える。つまり地域で健康に高齢期をすごし、その能力をみずからの人生の充実と地域の発展のために活用する高齢人材を養成し、同時に生涯の友人を得るための機会とする施設だったのである。

医療・介護・福祉のための「地域包括支援センター」、就労のための「シルバー人材センター」とともに、新たに高齢人材を養成する（仮）地域高齢人材養成センター」が構想されて、その

中核になるのが「市立高年高等学校」である。中学校区規模で希望者全員が修業することを目標にして、着実に運営することになる。

「平成の大合併」時の重要な検討課題であった人材教育なのだが、文科省からその提案はなく、省内に担当する部局もつくりすぎたことを、地域高齢人材養成期における欠落として受け止めねばならないだろう。もちろん、これからでも遅くはない緊急課題である。

幼児期保育・教育とともに、新たな「長寿社会」に対応する高齢人材養成の教育機関が厚労省・文科省によって検討され、自治体に新設が指示されなければならない時期なのである。高齢者課題は厚労省が担当とする縦割りの理屈は通用しないであろう。

ここは政治課題としての一〇年遅延を認めた上で、なお高齢化が進行するわが国の課題であることを文科省は早急な検討と対処が必要だろう。「生涯学習」だけに固執すべきではない。先に述べたようにこれは「長寿社会」をそれぞれの年代で共有するために重要な役割を果たすことになる。

「人生六五年時代」から「人生九〇年時代」への意識変革を促し、高齢者に社会参加を訴えたのは、ほかならぬ内閣府の「新・高齢社会対策大綱」（二〇一二年九月、閣議決定）である。六歳〜九〇歳までの二五年の長い「成熟期の人生」を送るに当たったの知識や技術や生涯にわたる友人は必須の条件である。内閣府・文科省による新提案は、周遅れを回復する急ぎの課題である。その経緯のなかでの官民協働の高齢者教育の推進、遅速が「特性あるまちづくり」の

差を生むだろう。

合併の結果、「個性ある地域の発展」という合併による地方分権の目標とは裏腹に、往年の特性や精気を失って萎えている地域がみられる。「市立高年大学校」（中学校区）での卒業生とその人生への精気ある取組みが地域社会の活性化に与える影響は測りしれないのである。

新しい「地域社会」が、高齢者にとってもだれにとっても暮らしやすい姿になるためには、地域社会をつくる高齢人材の養成は不可欠なのである。

「地域カリキュラム」がそれぞれ特徴に

＊地域特性を学んでまちづくりに活かす

多くの県が「教育立県」を宣言しているのは、何より地元で暮らして地元を豊かにする人材の育成に力を入れているからである。

すでに全国各地で成果をあげている「地域高齢者大学校」（生涯大学校、シニアカレッジほか名称はさまざま）は、地域活性化を担う人材を養成するために、それぞれに地域性を加味したカリキュラムを構成している。

修学するのは六〇歳をすぎた高齢者で、これまでの経験に重ねて「人生九〇年時代」の高齢期人生を見据えて、有意義に過ごすための知識や技術を新たに習得し、生涯の学友を得ている。

活動的な高齢者は増えつづけている。その人びとが地域でいきいきと暮らす姿が増えるために「地域カリキュラム」は重要な要素である。

ここで注目すべき実例として、兵庫県の「いなみ野学園」を見てみよう。

全国に先駆けて開設した四年制高齢者大学校で、六〇歳以上が入学資格。週一回の講義で、学科は園芸、健康福祉、文化、陶芸。クラブ活動には高齢者らしく、ゴルフ、詩吟、ダンス、盆栽、謡曲、表装、太極拳、ゲートボールなどがある。より専門性をもつリーダー養成のためには大学院も設置されている。一九九九年には「いなみ野宣言」を出している。

「地域高齢者大学校」の名称はいろいろである。

沖縄県は「かりゆし長寿大学校」（一年制）、島根県は「シマネスクくにびき学園」（二年制）、
橿原市は「まほろば大学校」（二年制）である。

各地で各様の構想で実施されており、東京の世田谷区生涯大学シニア・カレッジ（二年制）、
江戸川区総合人生大学（二年制）、成田市生涯大学院（三年制）などではそれぞれに独自の学科
とカリキュラムで模索を重ねながら、個人的な能力開発、地域社会が必要とする多様な能力の
養成などの目標を掲げて活動している。

ほかにも栃木県シルバー大学校（二年制）、千葉県生涯大学校（二年制）、明石市あかねが丘
学園（三年制）、明石市好古学園大学校（四年制）、船橋市ふなばし市民大学校（一年制）など、
それぞれの特徴を活かして開校している。

先に述べたように自治体主導で官民協働の特徴のある「市立高年高等学校」（中学校区規模）の全国展開が急がれる時期にある。

地方大学の「多重活用」が生き残り策

*子は昼に親は夜に同学親子の談論風発

地方の公立大学は「均衡ある国土の発展」のために駅弁大学などと呼ばれながらも全国の高等教育機関として成果をあげてきた。全国どこも共通の同じようなカリキュラムを組んできたために地域の特徴を活かすことができないうえきた。

だが、国の政策が「個性ある地域の発展」へと転回して、地方大学も独自の地域性を取り入れた講座によって変容するチャンスを迎えている。地域経済、地場産業、地方文化・言語・歴史、伝統工芸などといった「地域関連講座」が並ぶことになる。受講者はエイジング・イン・プレイスで「人生の第三期」を過ごす高齢者。「地方大学高年学部」である。

地方大学が地域の特性を採り入れた課程を強化しているのは、時代に即応した生き残りの手法でもあるからだ。

東京ではいち早く東京経済大学では二〇〇七年四月からシニア対象の大学院を開講した。出願資格が五二歳以上。立教大学でも開講。早稲田大学は学外キャンパスで開講している。埼玉

大学は「充実した第二の人生を埼玉で」ということで、夜間コースをシニアに開放した。

地元にもどって高齢期を迎えようとする「Uターン」型の人びと、高齢期を迎えて新しい知識を求める地域住民の要請に応じて開講するのが、地方大学の「シニア向けカリキュラム」である。人気テーマによっては、全国各地から高齢者が勉学にやってくる。長期滞在し、そのまま定住者あるいは永住者になるかもしれない。

地域活性化に参画する人びとの物産情報・地方文化といった講座は、人気になるだろうし、大学は人材の集積、発信拠点としての機能を果たすことになる。

そしてなによりも愉快なのは、同じ時期に同じキャンパスで、オヤジやオフクロは「エイジング・イン・プレイス」での夜間「高年学部」で人生第三期のための知識や情報と生涯にわたる友人を得る。そしてムスコやムスメは昼間の大学課程で、人生第二期の社会参加のための専門知識を学び、活動期の友人を得るといふ地方大学の「多重活用」である。

六〇歳をすぎて長い高齢期を視野に入れた「シニア科カリキュラム」でスキル・アップして、前職の経験を合わせて「人生の第三期」をめざすオヤジやオフクロや先輩たちの意欲的な姿が、同じキャンパスでグータラに過ごしていた現役学生に与える影響が大いに期待される。

「大学多重活用」のメリットはもうひとつ。

「高年学部」には六〇歳をすぎてなお知識欲の旺盛な人びとが学びにくるわけだから、名誉教授や「シニア教授」のスキル・ブラッシュ、つまり知識のさび止めにも大いに役立つことにな

るにちがいない。

四 中心街を「モノと暮らしの情報源」に

どうなる変幻自在な商品流通

*二四時間営業の明かりは頼りになる

「みんなに親しまれる商店街」

という横断キヤッチフレーズが、いまもM市駅前通りの入り口に掲げられている。

が、シャッターを下ろした店舗が目立つ商店街からは活気が間引かれていて、こちらの親しい気持ちも間引かれる。二〇年ほど前までは、あれほど住民みんなに親しまれていた商店街だったのに・・・。

「ここまでさびれちまった商店街にもう未練ないね」

と通りすがりの人から言い放たれるのが一般的。

「シャッター通りには期待しない、コンビニとスーパーがありやいいじゃんか」

と若者からは無視されるのが風潮。

たしかに親しいみんながいなくなった商店街を歩いていても楽しくない。駅から市役所への

往復の道でしかない。残っている店からの吸引力もない。こうないづくしでは、歩いていてもやりきれない。でも底を打った感もないではない。地の底から動く気配がする。

いまものを買うだけなら、家にいたってインターネットの「電子モール（商店街。楽天やamazon）」で何万件もの商品に出会える。購入はクリックするだけで、明日にも宅配される。ほかにテレビ・ショッピングや通販。クルマで町外に出れば、バイパス沿いにケバケバしい広告の大型スーパーやちよつと休めるファストフード店があり、町なかには駐車場設備のあるコンビニが網をはっている。

スーパーの明かりが消え、パチンコ屋の営業が終わり、最終電車が着いて駅舎に人が動かなくなったあと、明かりがつづく二四時間営業のセブンイレブンやファミリーマートは、親しく頼りになる生活拠点なのである。やや親しみに欠け警察や、やや頼りがいのない宿直員だけの役所よりは。

変幻自在な商品流通の包囲網。そのなかで駅から旧市街へと通じるM市駅前通り商店街は、じわじわとさびれるにまかされてきた。商店街は再生への契機もないまま、どこも成り行きにまかされてきたように見える。利用者や歩行者には、だれにもどこでも実感されているところ。

移動がクルマ中心になる一方で、日用品が国産から安価な途上国製品になるという経済変動の「津波」にさらされて、長く住民に親しまれてきた商店街は求心力を失い、歩一步、顧客の足が遠のいていった。国産の優良品が途上国産の粗悪・中流品に変わっただけで、日用品に途

切れが生じたわけではなかった。生活感性の高い高齢者はがまんすることになったが、ふつうで安ければそれでがまんはできる。それがアジアのみんなが先行していた日本に追いつくプロセスであると思えば、文句のいいようもない。

商店街は「モノと暮らしの情報源」だった

*「地域の顔」も店じまいしたシャッター街

M市駅前通りに限ったことでないのは、懸命な自助努力にもかかわらずどこも同じ「ガイアツ」に屈したからである。貿易不均衡によるアメリカでの日本製品たたきがあり、日米構造協議があり、「大規模小売店舗法」改正からはじまったのに、間は複雑なわけではしよるが、いまやアメリカ商品はぼちぼちで、途上国製品を売りまくる超（スーパー）スーパーが跋扈している。商店街をまるごと取り込んでしまうような大型ショッピングセンターまで登場。もはやいまや、旧来の流通網では攻めるも守るも手立てはないが、生活感性が高く優れた日用品を求める消費者からは見放される行く先は見えている。からだに感じられる程度の微震だが、商店街は動き出しているのである。

一九八二年が小売店のピークだったという。そのころは全国に一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所あったという。商店街の数もそうだが、街に人をひきつける活気と魅力があった。

商品ばかりか人生の先達があちこちにおいて、元氣も知識も割引もしてもらえたのである。

歩行型の住民にとって「モノと暮らしの情報源」であった中心街の崩壊が、二〇〇三〇年で住民から何を奪い、何をもたらしたのか。二〇〇三〇年後に何が必要とされるのか。

再生への努力は実にさまざまに試みられているが、後継者のことまでを考慮すると、なお頑張って営業をつづけている老舗といえども猶予はない。

明らかな「構造の問題」だったから、店主の努力では太刀打ちできない。わかっているとうしろもない。だれにも現場に出くわした記憶があるだろう。

まず細々と商いをしていた小売店で儲けが出なくなり、投資ができなくなり、将来に魅力を失って後継者がいなくなった。原因は店主の才覚の有無に封じこめられ、店主は煤を払った神棚にむかって、何代目か前の創業の先人に不明をわびながら店を閉じたのだった。

自家用車が増え、じわりじわりと鉄道客やバス客が減りつづけ、商店の店じまいの時間が早くなった。それとともに商店街に防犯用シャッターが増えた。シャッターに愛きょうのある絵を描いたりしたが、街を歩く人びとへの親しさを閉ざしたのはまず商店街のほうだった。めつきり人通りが減り、店内で話し込むお客の姿も少なくなった。

中心街の道筋の中心にどっしりと店を構えていた地元資本の古手の商店までが、「え、あの店も？！」といった話題になりながら消えていった。

まことに惜しまれるが、もはや再生が不可能な商品もふくまれている。その中には江戸期か

らの歴史を持ち、「地域の顔」を支えていた特産品と老舗が含まれる。和紙・毛筆・べっこう・陶磁器といった工芸品の店や、呉服・家具といった伝統品を商っていた有名老舗までが次々に看板を下ろしていったのである。地道に地方出版を手がけて、地域文化の拠点だった老舗書店も、大型店舗の駅前出店のあと、しばらくしてひっそり灯りを消したのだった。

そして地方の流通を支える砦であり、地域住民に馴染みの濃かった地元資本の百貨店、たとえば宇都宮市の上野百貨店や和歌山市の丸正百貨店といったあたりの有名店舗の経営不振が伝えられるのと前後して、M市でも地元資本の有名百貨店と家具店が同じころ倒産した。そのころ、市民に商品流通の変貌と再開の不能なことを決定的に納得させることになった。

これまで二〇年ほどでこうも変わるものか。ではこれから二〇年どうすればいいのか。まちの地産品を購入したり、歩いて集える中心街「モノと暮らしの情報源」は要るのである。

「歩行生活圏」と「車行生活圏」

* 中心街に集う子どもと高齢者

全国のまちづくりの中にも、「歩くまち」をテーマとしている都市がある。

秩父市・倉敷市・安来市などがそう。高齢社会への移行を見越して、「買い物空間にとどまらず、心地よく歩いて過ごせる時間消費型の生活圏をめざす」として、街を歩行者モータリ化する

都市もある。訪ねて行って歩一步の成果を見てこよう。

地域のまちの中心街については「歩行生活圏」と「車行生活圏」との住み分けが必要であろう。「歩行生活圏」のおもな利用者は、日課として小一時間ほどの散策に出動し、使いなれた小物や茶菓を購入し、暮らしの情報源としている同年配人びととの会話で過ごす高齢者、日用の買い物をする母親たち、安全な「居場所」を楽しむ子どもたちである。

「街に子どもたちの姿や歓声が聞こえないようなら活性化に明日はないですよ」と商店会を代表して中心市街地活性化の「基本計画」作成にも参加しているUさんは熱意をこめてそう語る。その通りです。

日課としてやってくる元気な高齢期の人びとが安全に過ごせる「歩行生活圏」の中心街。何かあればやっかいになる「地域包括支援センター」が至近の距離にある。祖父や祖母と孫が、父親や母親と子が、安心して散策や買い物や居場所を楽しめる「世代交流のステージ」である。

「三世代四季型中心街」をめざす

＊日課でおとずれる「買い物＋遊歩空間」

わが街の景観として、「地域の四季」をどう取り入れるかは住民みんなの課題である。家のなか、街並みそして街路、中心街もまた意図してはつきり「地域の四季」を感じさせる「舞台づ

くり」が必要なのである。

まちづくりの中にも「歳時記の感じられるまち」（長岡市）や「歩いて楽しむ街、四季が感じられる街」（盛岡市）をめざすところがある。論じるのもいいが一步進んだそういう街を訪ねて歩いてみるのがいい。

商店街、中心街の催事は、これまでは「中元」（夏）と「歳末」（冬）の二季だけだったのを、それをぐずぐず引き延ばしていたのを、季節ごとの「四季の催事」としてすっきり構成し直す。住民が季節ごとの街空間の変化を楽しみにしてくり出し、さらに次の季節への期待を抱けるような演出に、商店街の賑わいを取り戻す契機がある。

その演出者は地元の「街元気リーダー」である商店主と高齢店員と高齢住民が中心を担う。二季型から四季型へ。そしてさらに「三世代四季型中心街」へ。

「三世代四季型中心街、生き残りはこれなんですよ、Uさん」

しかし弱体化した商店会を代表するUさんは、理屈としてはわかるが、年二回でさえもすぐ次がやってくるというのに「年に四度はムリ」という。

ムリして二度ではなく、ムリなく四度。

地域をよく知る「地識人」の「街元気リーダー」がボランティアとしてお手伝いして「季節ごと四つのわがまちの景観」を街空間に取り込んで賑いと呼び戻すのだから、といってもUさんは首をタテに振れない。M市駅前通りは先駆を切れなさそうである。

四季折り折りの地域の風物を取り込んだ春・夏（中元）・秋・冬（歳末・新年）を表現する季節の装飾をほどこすのにムリなはずがないのに、自力での再生に動けない。それならなるにまかせられない。

「三世代四季型中心街」の演出のために、わがまちの歴史・伝統、産物、風物、人物、文化、芸能、技術といった「地域の特性」に目を配り、「わが中心街」の態様として取り込む。こんなまちづくりを、わが人生と重ね合わせる高齢者ならいくらでもいるはず。「エイジング・イン・プレイス」の愉快的現場がそこにもここにもあるはずなのだ。

街の商店街、中心街の大事なテーマに、子どもたちの居場所づくりがある。

「青少年のステージ」づくりである。たとえば遊具を固定せず子どものアイデアで変化させる児童公園や「一八歳以上お断り」といった「ブック&ゲーム・センター」。後者なら好きな本やメカやソフトに存分に触れながら、友だちと歓声をあげて楽しめる。そんな子どもたちのための安全な居場所づくりは、次世代を育て、街を活性化する中心街の重要なテーマである。

こども園や学校を終えて、構内の施設や塾がよいのほかに、週に何日かはこういう街なかの施設ですぐすことも成育の過程ではたいせつなのではないか。

日用品については、高齢者といわず地元住民が求めるのは、必要とする商品を頼めば手にはいるユーザー中心の流通である。そういう要望を取り入れた新たな流通拠点の再生が、地元生産者と商店会と商店主と高齢店員と高齢住民が協議して運営する「地域流通スクエア」（生産者

や地域住民が主体の道の駅」といった形態の「地域みんなのためのおみせ」である。

お互いに「カオが見える流通」の拠点であり、商品性の高い「地場季節商品」を主力商品としながら、スーパーやコンビニでは入手できない超コンビニ商品を提供し、地域の人びとの要望をサポートする。商品知識の豊かな店員がいて、高齢者が継続して用いる日用品の注文と配達を一手に引き受けてくれる。自治体の福祉健康課とも対応して介護者などへの物品の配達などもおこなう。

地元住民が必要とする商店、公共機関・施設の情報をネットでむすんでいる「中心街の中心核」として、「地域流通スクエア」を成功させたい。

そういう「みんなのおみせ」を組み込むことで、「商店街の求心力」をつくりだす。二四時間営業の「(超)スーパー・スーパー」機能をもつ頼りになる拠点が登場する。

「歩行生活圏」での「三世代四季型の中心街」の姿をスケッチしてみよう。

町全体が「地域の四季」をたいせつにするようになれば、その中心街にも色濃く反映される。地産品をはじめさまざまな季節用品が集まる。街の伝統行事や風物が公開される。そして次の季節の訪れが待たれるような「三世代四季型中心街」がステージ化される。

そういう姿になれば、「車行生活圏」と共存する四季折り折りの「歩行生活圏」として、地域の暮らしを豊かにする「わが街の中心街」が再生され、四季の暮らしが創出されることになる。

「商店街って、おもしろいじゃん」

と、通りかかった無季節・無機質そだちの若者たちがいうだろう。

一人ひとりがそうして過ごすうちに生活圏にある「買い物＋遊歩空間」は「三世代四季型中心街」へと変貌がすすむ。近隣に住むだれもが小一時間ばかり、遊歩（散策）や買い物や語り合いのためにやってくる「暮らしの情報源」としての中心街。

「季節の風物」に安らぎながら、ふと出会った知人とひとしきり気軽に談話を楽しみ、お菓子屋のテラスで一杯のコーヒーと店自慢自家製ケーキの「甘余の味」を味わい、あるいは茶を商う老舗で一服のお茶と和菓子を味わう。

「両袖清風」の和風街着で訪れて、ひとときお国ことばで語りあい、暮らしの声や音を快く聞き、子どもたちの遊ぶ姿を見、歓声を聞き、街の臭いを胸に収めることができる街。だれもが小一時間ばかりやってきて、みんなで作るそんな「三世代四季型中心街」なら、今日にでも行ってみたい。